

当世仏教談義 I (94・8・20)

— 物故者追悼の午後 —

片岡 義道 (昭15・文乙)

このように皆様にお話をさせていただくことを誠に光栄と存じます。お話は後でさせていたたくとしまして、演奏に先立ちまして簡単に今日弾いていた船橋さんのご紹介と曲につきまして、必要最少限のことを申し上げたいと思います。

本日、ピアノ演奏をして下さいます船橋さんですが、この方は実は私京都芸大の永年音楽学部におりまして、その時の教え子でございます。そこに書いてあります昭和55年ご卒業、それから結婚されましたご主人は、現在京都大学助教授をされていまして、ご専門は大脳生理学ということだそうでございます。最初にありますピアノ演奏のソナタでございますが、ベートーヴェンの作曲であります。それを何故選んだかと申しますと、プログラムをご覧になっていただきますと、第三楽章が、実は「葬送行進曲」となっております。ある英雄のために作曲したとこのように記されております。そういう意味で、本日の催しにぴったりかと思ひまして、私が選曲をさせてい

ただきました。第三楽章が「葬送行進曲」でございます。

この後が私の「極楽声歌」なのですが、こんなもの一体何だと皆様お思いだと思います。無理もございませんのですが、これは一一五〇年頃、平安朝末期のものでございまして、永らく埋没していたものでございます。楽譜とか、そういった資料は残っておりましたが、それが一体音楽的にどういうものであるか分かりませんでした。それを実は一昨年、平成五年四月二十八日に東京の国立劇場におきまして、その委嘱により、数年かけて私が研究いたしました結果、初めて復曲したものでございます。その極く一部を紹介させていただきます。本来ならば、雅楽と一緒に合唱すべき物なのですが、本日は雅楽はございまして、歌だけでご免を被りたいと思います。これにつきましましてはより詳しくは後程の話で触れさせていただこうかと思えます。それからこの歌詞でございますが万葉がなのようなもので書かれております。

九保牟乃波知須爾 和礼良遠美知比介土

美多保土介仁也 知幾利遠牟須不

そこまで歌わせていただきます。

—ピアノ演奏が入る—

—極楽声歌の一部—

極楽声歌は、仏教のお経の一種と考えていただいて結構です。ちゃんとした楽譜もありま

すし、決められたように歌わないといけません。

さて後白河法皇という方がいらっしやいました。この方は大変な音楽好きで天台声明にも通じておられました。あらゆる音楽にも通じておられたが、梁塵秘抄というのを著わされまして、「梁塵秘抄口伝集」という中に書かれているのを見ますと、ある日法皇は、宮中へ叡山から僧を呼んで何かお勤めをさせられる。それを聴いておられた後済んでから

「ちよっと来い。お前がやっとなるお経は、ちよっとおかしいんじゃないか、ここがああだ、こ
うだ」

と言っていろいろ批評された。そこでその僧は赤面して、

「御布施も何も結構でございます」

と言って飛んで帰ったという意味のことが書いてあり、後白河法皇という方はそれ程の名人であった訳です。私は先程「大原流声明」と申しましたが、あれは天台宗におきましては、慈覚大師円仁という方が平安初期におられ、この方は中国に十年近くおられて「入唐求法巡礼行記」という膨大な日記を書かれた。これをライシャワーさんが英訳されました。あの円仁が、向こうで充分儀式音楽を習って帰って、叡山で始められたのが、これが天台声明の始まりだと言われております。それ以来、血脈相承譜と言いまして、誰が誰に授けていったというようなものが、現在迄伝わっております。私はこの血脈相承譜の一番末におるわけですが、その中に後白河法皇の名前

がちやんと出ておるわけです。龜山天皇の名前も出ておりますし、その他いろんな皇族貴族の方が、この時代には続々と、血脈に名を連ねておられます。つまり宗家の中の一人だったんです。平安朝の末期はそういう時代でした。これは声明のみならず、日本の文化史上ひとつの黄金時代であつたんじゃないかと私は思っております。

平安の中期から後期にかけまして、仏教芸術というものは最高の段階に達した。何も音楽のみならず、宇治の平等院をはじめとし、法成寺、法勝寺、円勝寺などの壮麗な寺が続々と建つていきますし、絵画も彫刻も素晴しかった時代です。これは皆さんどなたもご存じです。ところがその時代の声明すなわち仏教音楽につきましては最近まで殆んどその実体が知られていなかったのです。やっと最近になりました。この音楽がどのようになっていたのが、各種の資料によって少しずつ分かってきました。ここに書かしていただきました「順次往生講式」、これは仏教学者の方々の書かれた物を見ますと、一一五〇年頃に出来たというふうに学界では定説になっております。もうひとつはつきり分かりませんが、これを作った人は、叡山の僧の真源だという説もござります。

これの古い写本が現在知恩院に残されております。これは卷子本になっておりまして、この現物は文治二年（一一八六年）の奥書がついております。これは現在国の重要文化財になっております。その順次往生講式の中の一節がこの極楽声歌なのであります。この講式全体はものすごく

長いので、恐らくこれを始めから終いまでその通りにやったら四時間以上はかかるだろうと思います。

その中の極く一部を、それも中味を中抜きにして上演しましても、優に二時間近くかかりました。よくもまあ昔の人は、悠長なことをと悠々とやっていたものだと思います。その中に五聖樂の破という曲があります。五聖樂の聖は、順次往生講式の中には聖という字が書いてありますが、現在に伝承されている雅樂の曲名といたしましては常という字になっております。それと合うようにこの声歌が作られているのです。

ところが知恩院の巻物には、歌詞だけが載っておりまして、楽譜その物についてはおらんのです。それで永らく解説不可能となっていたのですが、最近になりました幸いなことに、この極樂声歌の楽譜が見つかったのです。一つは大原の来迎院谷にある如来蔵という所にありまして、これは南北朝時代の写本なんです。もう一つは横浜市にある金沢文庫の中に在ったのです。

この金沢文庫の中に「樂邦歌詠」と称する写本がありまして、これを数年前に行つて見た訳です。それが驚いたことに魚山の極樂声歌と称する楽譜と中味は同じ物であつたんです。楽譜の書き方が全然違っていましたので、一見違ふ曲と思つたのですが、よく調べてみますと、実は同じ旋律が違ふ楽譜で書いてあるんです。理論的には全く違つたシステムで書かれていたがために反つて良かった、実体がよく判かつたのです。どういふ音をどこで出すか、どういふ拍子かもきち

んと書いてあるんです。よし、これなら復元可能だということで、私が一年半程研究いたしました結果作り上げたのが、今のああいう形になったんでございます。ここで私が申し上げたいのは、後白河法皇がいらした時代は、仏教音楽、声明も素晴しく進んでおったんだ、当時のお経はそういうハイレベルにあったんだという事なんです。これと現在のお経との落差たるや、まさに話にならないということ、これを知って貰いたいわけです。

当時、と申しますと一一五〇年頃に、ヨーロッパではどんな音楽がやられておったかと言いますと、パリにノートルダムという有名なカテドラルがございますが、このノートルダム寺院、これが昔は音楽の中心地でした。キリスト教のグレゴリオ聖歌から始まって、オルガノンという初期の合唱曲が歌われておりました、そこにはレオニーヌスとか、ペロティーヌスという大家がおったのです。当時の楽譜も一部ではありますが残っております。ところがこのオルガノンという曲には楽器の伴奏がないんですな、アカペラと称しまして歌だけなんです。楽器の伴奏をしてやっただけということ、恐らくなかった様です。

ところがこちらの雅楽というのは、小規模とは言え室内オーケストラなのです。管弦楽器や打楽器もありますね。これと合うように極楽声歌が出来とったということは、日本の仏教音楽の方がその当時は、ヨーロッパの教会音楽よりも優れておったとさえ考えられるわけです。これは何も私の手前味噌で勝手に言っていることではありませんで、れっきとした客観的事実なの

であります。ところが問題はそこから後の事なんです。それから以後はどうなったか、ヨーロッパの音楽は次から次へとどんどん進歩しまして、楽器も改良され、オーケストラも出来る。技術も進むという事になりました。ところが日本の方はと言いますと、この時代が頂点で後は落ちるばかりです。ちっとも進歩しない。だんだんと落ちて行つて、遂に現在のこの情無い非音楽的なお経にまで墮落してしまつたのです。これは誠に残念なことです。もし日本の仏教音楽が当時の勢いでヨーロッパに負けずに進歩していたら、恐らく今のように西洋の音楽を慌てて輸入して、日本人がヨーロッパの演奏家の前に平伏する必要はなかつたことでしょう。

先程も申し上げましたが、現在の既成宗団でふつうに唱えられているお経と申しますと、調子なんてどうでもいいということになっています。どんな高さで音を出しても一向構わないという有様です。ところがこの順次往生講式にはちゃんとした定まつた調子が指定されているんです。一一八六年の知恩院の写本には、この法要全体は、全部平調を崩すな、ちゃんとこの調子を守つて演奏しろと、はっきりと書いてあるのです。当時の声明家はそれ位厳しかつたんです。また拍子もついてありました。ところが、今日ではどうでしょう。数人のお坊さんを集めてお経を上げてもらうことになつたとしましうか、あるお坊さんは高く、隣りのお坊さんは平気でそれよりも低く音を出す。これでは合唱とは言えませんね。雑唱と言えます。皆が合つていようといまいと、そんなものには全く頓着しないという態度です。この意識、これでいいんだというその

感覚が実は恐しい。その自覚が全くないのです。今ではとうとうそこまで落ちました。それから拍子のことですが、勿論これもなくなりました。グレオリオ聖歌も当初は拍子はなかったようです。やっと先程申しましたパリのノートルダム学派になりました、これが入って来たんです。

我々の方では、インド、中国を経て日本に入りましたお経声明には、当初から拍子があったかは、はっきり断定出来ませんが、それがはっきりとあるようになったのは、平安朝の中期なのです。この時代になりますとピッチも定まる、旋律もきちっと守られる、合奏も出来るということで、ここに初めてあるべき姿のすぐれた音楽に出来上ったのです。

ところが、それから以後は墮落する一方で、現状ではもう音楽の名に値しない雑音騒音の固まりの様な姿にまで成り下ってしまいました。ところがそれでも失われなかったことがひとつあるんです。皆さんそれは何だと思われませんか。それはギヤラを取ること、これだけは忘れなかったのです。お布施と称してお金だけは立派に頂戴するでしょう。私あれはギヤラだと思っんです。ギヤラをもらうのはプロなんです。アマチュアはギヤラをもらわない。だから場合によっては、間違っても仕方が無いと言って済まされると思っんです。ところが、プロの演奏家は、ギヤラをもらう限りはそれ相当の、それにふさわしいだけのものを社会に還元せねばならないという道義的責任があるのです。それでなきやあプロとは言えないと思っます。ところが、現在のお坊さん方はね、御布施だけは忘れずにちゃんともらう。うっかり忘れようものなら請求するんですな。

それはそうといたしまして、かつての黄金時代の仏教音楽と、現在行われている普通のお経との落差は全く想像を絶する程に大きいのでして、なぜこんなにまで落ち込んだのかと言うと、それは一にも二にもわれわれ僧職の怠慢に帰すると思います。最近の新聞を見ますと、グレゴリオ聖歌がひとつのブームを起こしているそうですが、今の時代に氾濫しているいろんな音楽には何か精神的なものが欠けているからではないでしょうか。そういうものに対する潜在的な欲求が、大衆の中に出て来ているからでは無いでしょうか。グレゴリオ聖歌が大変歓迎されているところのこのようなひとつの原因、それに決して負けないものが、この仏教の声明の中にある筈なのに、それを知らない。またやろうともしない、ここに問題があると思うのです。私は現在の既成宗団は、並べて革命を必要とは思いません。えらく極端なことを言うようですが、革命とは、従来のものは何もかもぶっ壊して新しいのを作れというのかねと言われるかも知りませんが、そうではないんです。私の申したい革命というものは、意識革命なんです。宗教活動を専門としている僧職、坊さん方の意識を変えていかねばなりません。そして二次的には、一般に仏教に寄与しておられる皆様方のお気持も何程かは変えていったきたいと、そういう意味での革命が絶対必要なんです。今のようなことをしておりますと、既成宗団というものはやがては行き詰まります。特に皆さんのような社会をリードしていく知識階級の方からは見離されてしまふ、いやもう既に見離されているんじゃないでしょうか。唯口に出してはつきりとそうおっしゃらない

だけです。ここにいる同窓会の方々に私聞きたいのですがね。皆さんが果して既成宗団の何宗に属しておられるのか知りませんが、それに心から帰依して、納得し、手を合わせている、こういう方が果して何人いらっしゃいますか。「しようがないから目をつぶって付合ってやっで行こうか」とこういう方が殆んどではないでしょうか。いかがでございますか。一般の坊さん方がこんなことではどうていダメで、今のままでは見離されて当然だと私は思います。

ただ、現況がそうだからといって、仏教そのものに現代のこの世に、本当に精神的にアピールするものが、全部失われてしまっているのかというと、これは必ずしもそうでは無いということをし上げてたいのです。ただそれが残念なことには、どこへ行きましても、既成宗団の現実の宗教的行事が行われている現場に殆んどこれが現われておらんという点が問題なのです。それがちやんと理解され、つかまれておるかということになりますと、その答えは殆んど否いなです。問題はこれなんです。これを私は先づ音楽面から申し上げたわけです。

ここで再び順次往生講式に就いて申し上げますと、これは音楽面において優れたレベルに達しておるものと申しましたが、実はそれだけではなくて、宗教的な思想面においても優れておるのです。どういう理由で、こういうお勤め、こういう長大な一大宗教演奏会をやるかという理念がこの講式文中で述べられておるんです。これがまた実に素晴らしい。一言にして申し上げます、「大樹緊那羅王所問経」という經典の主旨に基いてそれが主張されているという事です。

これは、四巻から成る大乘仏教の教典で、訳者は例の鳩摩羅什なんです。羅什と申しますと、例の妙法蓮華経あるいは阿弥陀経というような、ポピュラーなお経を中国語に訳した人なんです。が、この経典は音楽というものを中心に、大乘仏教の精神を説かんとした経典なんです。突き詰めて申しますと、どういうことか。釈尊の説かれた古い経典によりまして、音楽とか、踊り、歌舞ですね、そういうものは当初は釈尊によって退けられたと書いてあります。そんなものに携わっておいたら、人間は墮落するからという理由によつてです。

ところが一方で釈尊は、お経を何の節もつけずに、単調に読んでいるだけではダメだぞと云つておられるのです。つまり人の耳に入りやすいようにする方便として、経典にちゃんと心地好い響きを与えて、抵抗なく聞ける、又は唱えられるようにすることはよろしいと奨励されておられるのです。ですから、音楽は一方では修行の邪魔になる。誘惑が多いからダメだと言つておられる反面に、しかし経典に節をつけてやることはよろしいと。こういうのが釈尊の音楽に対する基本的なお考えであつたと思われれます。

その後釈尊が亡くなられましたから何世紀か経ちまして、仏教思想というものは、だんだんと変遷していきまして、いわゆる大乘仏教思想というものが起こつてまいります。そうなりますと、その中の音楽に対する考え方が變つて来た。どう變つて来たかといひますと、原始仏教におきまして、一時否定されておりました一般の音楽がですね、これは経典を唱える音楽ではなくて、

普通の踊りやお祭りの音楽なんです、これをもう一度、それこそ大乘的な広い考え方によって、仏教の中に取り込もうという姿勢が出てまいりました。そして要は、音楽をやる人の心持ち次第で、気持の持ち具合で、どういう考えでそういう音楽をやるかということによって、世俗の音楽と雖も、何も仏教の悟りといえますか、そういうものの邪魔にならないんだ、むしろ場合によっては、その方が効果的で宜いんだということが主張されておるのです。詳しいことを申し上げる時間がございますませんが、要するに大乘仏教の根本理念は「空」の思想すなわち「空観」なんです。皆さんは般若心経をご存じだと思えますがね。色即是空、空即是色と申します。あの「空」ということなのです。この「空」ということ程やかましく言われながら、実際には本当に分かってもらえない概念はないと思います。これはこの席では申しませんが、いろいろな人が勝手なことを「空」について言っております。般若心経の本は夥しくございまして、私も大体見ましたけれど、本当になる程と思うような本は殆んどございせん。あんまり「空」を分かっておられない方が「空」を説いているように思います。申しわけございせんがそんな気がします。

この空観というものによって音楽の価値を転換することが出来る。今迄マイナスと言われたものでも、空観の、つまり心の持ち様によってプラスに換えることが出来る。そういう働きが空観にはある。空観によりまして、今迄世俗音楽はダメだと原始仏教で言われていたのを、そうではなくて、そういうものをやる音楽こそ、その大樹緊那羅王所問経という經典は音楽が一番悟りに

入るのに、都合のいい手段だということをお説かんとしているわけです。それを順次往生講式の作者は理念として始めに提出しています。こういう意味でこの法要を作る、つまり、はっきりとした理念的なというか、仏教哲学的な考えがあつて、そうしてこの音楽法要をやるということなんです。そうなりますと、この順次往生講式というのは、日本で出来た法儀だけれど、あらゆる点で実に素晴らしいと思うわけです。これが平安のあの頃に、日本の仏教芸術、否あらゆる芸術文化が最高潮に達したあの時代に音楽も今迄知られなかつたけれど、宇治の平等院や源氏物語などに決して劣らない位の内容のある音楽法要が、仏教哲学的な理念のもとに出来ていた。これはまさに驚異的ではなからうかと、私は思います。それが残念なことに、現代では殆んど忘れられてしまつています。これを何とかせねばと私は思うのでございます。

私に与えられた時間が残念ながら来ましたので終らせていただきますが、言いたいことは山程でございます。音楽を中心にしたしまして、既成仏教宗団の現状を申し上げて、本来あるべき姿に、我々も持つていかねばならないと思ひますし、仏教音楽＝儀式音楽の中には、現代も失つたものではあります。過去にはちやんとあつたということ、皆様のご努力を仰ぎながら一歩でも失われた理想の形態を取り戻すべく努力をしていきたいと思つております。

どうもご静聴ありがとうございました。